はしがき

加納心治

昭和61年４月、臨時教育審議会は第二次答申を発表した。この中には教員の資質向上に関して初任者研修制度の創設や現職研修の体系化及び教員免許制度の改革などが提案されている。その提案がそのまま実現されるとは限らないが、答申の趣旨には教員の資質の向上に並々ならぬ意欲を示している。

答申は、「教員に対しては、専門職として、職責の重大性を自覚し、不断に研鑽に努めることを求めたい」と述べている。しかし専門職（*Profession*）の概念については具体的な説明がない。われわれが専門職というにはそれなりの特徴的な性格がみられる必要があろう。

すなわち、第１には、教員の職業内容が医術・法律・技術などのように明確に限定されており、その背後には知識と技術の体系が確立されていることである。第２には、専門職には長期にわたる基礎的訓練と、より高度の研鑽が要求されることである。第３には専門職は自治にともなう倫理的責任を負っていることであろう。以上の説明では教職に関する専門職概念としては未熟であろうが、とにかく教員の質的向上への期待に応えるには教師としての自覚こそ先決であると考える。本校の高校教育研究も自主的研究に支えられた教師研修の一環であることはいうまでもない。

ここに紀要38巻を発刊するに到った。当初刊行を計画された先輩諸兄の遺産が受け継がれて今日に到ったという歴史の重みをこと新たに感じている次第である。

高校教育研究には、専門研究の視点に立って、新分野開発の方向での研究と、教育実践の中から課題を追求し、あるいは問題解決の実践経過を中心に効果的方法を明らかにしょうとするものがみられる。本年度の紀要では、英語・社会・数学・理科・保健体育の5教科6論文が掲載されている。この中で英語の２論文は、英語指導と関わって発見した課題を英語学の専門領域の中で追求しているものである。社会・保健体育の２教科の論文は、それぞれの教科の教材を取り上げ、指導上の問題点を教科教育方法として解明している。これに対し、数学では高校数学教材に対して、数学専攻の大学生の理解度の現状を調査分析した共同研究である。理科では共通一次テスト改善という今日的課題を取り上げ、テストを中心としたアンケート調査を実施し、それを分析している。理科の調査報告は、物理・化学・生物の３教官の共同研究によるものである。現代的学問研究に学際的研究がクローズアップするにつれ、共同研究の必要性が高まっている。こうした事態の中で教科連合の研究が実施されたことは、今後の研究体制に大きく示唆を与えているといえよう。

掲載の論文のいくつかは、完結された論文というよりも現段階までの研究成果をまとめた中間報告ともいえる。ここに大方の参考に供したのは、各方面からの批判と叱正を得て、次の段階への飛躍的進展を期待しているからに他にならない。腹蔵のない御意見・御教示を賜わるよう切望してやまない。